

Foundation for Shiretoko Institute of Wildlife Management

設立財団ニュースレター

Vol. 1

2013年11月10日発行

設立財団ニュースレターの 発行にあたって

一般財団法人知床自然大学院大学設立財団
代表理事 田中 俊次

豊かな文明社会に生きる我々人類は今、深刻で本源的な課題を自然から問いかけています。我が国でも全国的規模で「野生動物の反乱」とも呼ばれるような、人間社会と野生生物をめぐる問題が発生しています。これらの問題を抜本的に解決し、また、あるべき自然と人間社会との共生を実現する研究・調査が必要であり、また、これらを担う人材の育成が強く求められています。勿論これまでも、これらの課題に対応すべき人材の育成機関は創られてはいますが、今日の現状はこれを遥かに超えているのが実態です。そこで更に本格的で総合的な知識と技術を持つ優秀な人材であると同時に深い理念、哲学に裏づけられた倫理観を有する人物の養成が喫緊の課題となっております。これらを実現するため「知床自然大学院構想」は生まれました。

この「構想」は、1986年に策定された斜里町総合計画に盛り込まれて以来、町、民間レベルの「知床自然大学ワーキンググループ」及び官民協働の「知床自然大学構想づくり協議会」で検討されてきました。この構想を引き継ぎ、自然との共生を目指す国内及び世界のニーズに応えられる研究と人材育成を行う大学院に相当する高等教育機関「知床自然大学院大学」を実現するために、この一般財団法人は本年1月に設立され、大学院開設に向けた準備を始めました。

開設されるべき大学院大学に我々が留意したい事は幾

つかありますが、最も願っていることは、この大学で養成されるべき人材像であります。それは、本大学の「基本理念」にも謳われているように、「生命連鎖の宇宙的秩序を厳粛に踏まえ、その完全なる調和の中に人類が存続し続けることを希求します。」との一点を踏まえた人物の育成にあります。このように、高度な保護管理の専門能力は、その根底に本源的な生命哲学とも言うべき、しっかりとした理念を土台としなければならないと考えます。

つまり、研究、調査、保護の対象としての自然（生命）を把える眼差しが重要な視点となります。すなわち、自然界そのものが独自の生を保つ生命的な存在であり、人間は環境である自然と融和して初めて、共に生を営み・享受できるものであるという、極めて当たりまえの自然観が必要ではないでしょうか。

このような自然観に立って、人間と自然とが対立関係にあるのではなく、相互に依存し合う関係であり、生命主体と自然・環境は一体不二の関係であることを再認識する必要があります。これまでの欧米からの科学導入に伴って受け入れてきた思想、すなわち『創世紀』第1章第26～30節にもあるように、「神は、自ら創造したもののうち、人間以外の一切を人間の自由に任せ、人間が好きなように利用することを許した」とされる考え、それが今日の自然及び環境の問題を惹起せしめているのではないのでしょうか。我々は今、この点を見直して、しっかりとした生命哲学に基づいた倫理感をもつ人材を育てる必要があります。

とは言え、資金のない民間有志が大学を設立した例は、日本では見当たりません。どうぞ、私どものこのような壮大な事業、世界自然遺産知床に自然大学を創る夢を、希望を共有することに対してご理解を賜り、本財団の活動をご支援いただくよう、心よりお願い申し上げます。

INTERVIEW

当財団設立者 午来 昌（元斜里町長）

元斜里町長の午来昌さん（斜里町ウトロ在住）に、知床自然大学院大学設立への熱い思いを伺いました。

知床自然大学への思いはいつからお持ちだったのですか？

元々この発想は斜里町の職員から生まれたもので、私が町長になる前年、1986年の町の第3次総合計画に盛り込まれました。その後町も調査や議論を進めましたが、財政的な問題もあり、懸案事項のままでした。そんな中、知床の価値を広く世界に発信し、グレードアップするために、まず知床を世界自然遺産にという運動を始めました。93年のことです。それから皆さんもご存知の通り、2005年に知床は世界自然遺産に登録されました。

私が町長を辞めてからも大学構想はずっと残っていましたが、人が変われば、町が何を優先するののかも変わってくる。そんな中、2007年に民間レベルのワーキンググループが発足し、出来た報告書を読んだときに、私は「これは決して絵空事ではない」と感じました。

それからしばらくして、この財団設立の話が持ち上がった。町長を辞めて7年になるのに、のこのこ顔を出してよいものかと考えましたが、出来るだけ応援したいと思ったのです。

誰よりも知床の魅力を知る午来さんが、ここで学ぶ意義は何だと思えますか？

やはり知床は、海、森、動植物など目前が広大なフィールドです。身近な環境の中で調査、研究、体験ができます。また漁業、農業、観光業、林業などさまざまな分野の住民と直接接点を持つことができ、未来における地域の問題解決の糸口を探ることができる人材を育てることもできるでしょう。「自然との共生」という価値観を広く世界に発信し、宇宙、グローバルな視点から、地域全体のリーダーとなり得る人材を輩出できれば本当に素晴らしい。今の世の中、地域全体を見渡すことができるリーダーが不足していると感じていますので。

各地でクマやシカ、イノシシなど野生動物と人との距離感の問題が取りざたされていますが、知床ではヒグマ

との共生を実現しているルシャの番屋もある。もちろんそこは例外的な場所であり、その地域ごとの問題はそれぞれ難しいですが、答えを出す努力はし続けなければならないと思います。



発足から約10カ月、実際に活動をする中で何か感じることはありますか？

行く先々で皆さんに「ぜひ実現しようや」と言ってもらっていますよ。財団の役員含めて、いろいろな方の熱い思いから始まったものですから、実現に向けて何が何でも行動しなければという責任をいたく感じています。

具現化に向けて、この思いをどうやったら広く理解してもらえるか。今大事な課題だと思いますね。長い時間をかけてもらえません。時間が迫っている中で、苦勞をいとわず、丁寧に情報発信をしていかなければならない。そういう一つ一つの行動から流れが動いていけば、輪も広がっていくと思います。

話はそれますが、価値観という意味で忘れられない出来事があります。中学生の時にアイヌ民族の同級生がいました。何かきっかけで彼とケンカになったときに、私は「何だ！君はアイヌではないか！」という言葉に彼に浴びせてしまいました。私はこれをいまだに後悔しています。一生忘れません。当時は地域ぐるみでアイヌ民族に対する偏見を持っていたため、知らず知らず私もそういう価値観になっていたのです。私たちは過去を反省しなければなりません。だからこそ、今設立を目指す大学の「自然との共生」という価値観を広めることは重要だと思います。元々アイヌ民族が持っている価値観でもあります。これらを含め、この大学で身に付く力は、誰にも真似できない力になると信じています。

知床と私

相談役 丹保 憲仁

(北海道立総合研究所理事長、北海道大学名誉教授:15代総長、放送大学名誉教授:5代学長)

知床連山の稜線で

最初に知床を訪れたのは昭和34年の夏であったかと思う。地球化学会の知床巡検で、北大の仲間が巡視船と漁船で半島を回って勉強するという企てがあった。その漁船に北大職員山岳会の仲間5人と便乗させてもらって、夜中に網走を出港し夜明けにカムイワッカの番屋で下してもらい、20kgものキスリング・ザックをしょって船酔いに苛まれたまま竹梯子で滝の横を高台まで這い上る。今の観光道路の末端である。当時は道路などないから海からカムイワッカ川に至る唯一の方法である。温泉なめ滝の岩盤を越えて、這松の密集する尾根にとりつき硫黄山(1562m)の山頂を目指す終日の這松こぎが始まる。リーダーは2年先輩の北大山岳OBの新妻徹さんで、女性一人と駆け出しの工学部助教授の小生を含む5人組である。這松の枝に引っかかるザックを無理矢理ひきだして松の枝渡りをする数時間、この間地面に降り立つことなくひたすら稜線を目指す。夕刻に硫黄山火口間の鞍部にテントを張る。夜中に低気圧の余波が尾根を通過して、冷たい雨嵐となり、テントの索と杭の維持のために外に出て、ずぶぬれとなって凍死寸前の寒さを味わいながら漸く朝を迎える。

次の日は、台風一過快晴の初夏の稜線である。二つ池をすぎ、オッカバケ山を越え、サシルイ岳を過ぎ、三峰を正面に見てひたすらにまっすぐに羅臼岳に向かう。前日の這松こぎ渡りと嵐の夜と打って変わった、お花畑と淡々たる尾根道の楽しさは、その数年前に学生の頃、大雪の高根が原でウスバキ蝶などの学術標本採集を手伝って数日を駆け回って以来の楽しい尾根歩きであった。戦に敗れて10年少しのこの時期、すぐの眼下に国後の海岸線を見続けるのは、なんとも悔しいことであった。口バクチクという雷管を仕込んだ、熊取の仕掛けが有るから気をつけろと聞いていたが、それらしきものも熊にも会

わずタ暮れ近く羅臼平に着き、荷を置いて山頂によじ登る。夕暮れの雲がわいてきて、落日が我々の影を雲に映し、その周りに後光が差している。ブロッケン妖怪である。ブロッケン現象に会うとその人はその後遭難しないという言い伝えが有る。おかげで80歳まで、山で死ぬこともなく元気で生きてきた。

下り始めるころとつぷりと日が暮れて、代わりに皓皓たる満月が山を照らす。青い月光に照らされて深夜を麓まで降ることにする。最後尾を歩いていた小生は、道の曲がり毎に熊の臭いを感じて少々恐ろしかった。3日間知床の稜線にいて、人にも熊にも会うことなく午前3時頃羅臼温泉につく。こんな夜中に非常識な事と温泉の親父さんに叱られたうえで、泊めて貰う。標津までバスで出て、列車で帰る。幸せな知床との出会いである。

知床大学院大学を作るという話

それから50年も経って、知床博物館の中川・元館長から大学院を作りたいから手伝って欲しいという話が、上野さん帯同である。中川さんの博識と小さいがすばらしい活動をしている知床博物館の発展系として、お手伝いせねばなるまい。大泰司名誉教授が尽力していると伺った。小生が北大総長の時に構内にリスを走らせる計画に支援頂いたお礼をせねばなるまい。文科省の大学設置法人審議会会長や、大学基準協会会長、国立大学評価委員会委員長などを長らく務めたノウハウと人脈をお役に立てられるかもしれないと思ってお手伝いすることにした。専門職大学院の制度は小生が審議会長の時作ったもので、小さな特徴ある専門家養成プログラムを知床に作ることは大いに賛成である。近隣/近隣の大学と関係をもってプログラムを孤立させないようにすればよい。近隣に小生が理事長を勤めている道立総合研究機構の生命系のいくつもの研究所もある。是非一緒に知床学を作り上げる仲間に加えて頂きたい。

活動報告

財団設立からこれまでの主な活動をご報告します

Topic 1

1月10日 財団設立記者会見 in オホーツク総合振興局

当財団は2013年1月22日に正式に発足しましたが、それに先立つ1月10日、網走市の北海道オホーツク総合振興局で、知床自然大学院大学設立に向けた財団設立について、記者会見を行いました。



財団設立の経緯などについて説明する（左から）田中代表理事、
午来設立者、上野設立者

当日は田中俊次代表理事、午来昌、上野洋司両設立者、中川元業務執行理事の4人が出席し、設立趣意、目指すべき大学院大学の姿などを説明したほか、質疑応答に応じました。報道陣は新聞各社、テレビ局など約10社が参加し、関心の高さを窺い知ることができました。

当日にはNHKの地方ニュースで記者会見の様子が放送され、翌日に北海道新聞全道版、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞の地方版、また2月22日の日本経済新聞夕刊全国版に記事が掲載されました。これらの報道により、北海道内では広く財団の存在、活動を周知することができ、良いスタートを切ることができたと考えています。



記者会見翌日、新聞各紙に掲載された新聞記事コピー

Topic 2

5月23日 斜里町民向け講演会 in ゆめホール知床

1月の財団設立後、なかなか地元町民の前で大学院大学構想を説明する機会を持てなかったこともあり、5月23日、斜里町のゆめホール知床で、斜里町民向け講演会「知床に高等教育機関を作ろう！～知床自然大学院大学設立財団がスタートしました～」を開きました。

午来設立者がこれまでの知床の歩みや知床の価値、大学院大学構想にける情熱について、上野設立者は知床が生み育てる保護思想や人材育成について講演しました。また中川業務執行理事は、20年来町内で検討されてきたこの構想の経緯について説明し、今この財団が事業に取り組む必要性などを訴えました。

参加者は約50人。地元企業の経営者や町議会議員、教員、会社員、主婦、マスコミ関係者らさまざまな人に足を運んでいただきました。質疑応答の時間には「専門職

大学院大学という形は決まったものなのか」「大学院大学と町内小中高校との連携はどう考えているのか」などの質問が出され、活発な意見交換の場となりました。

今後も事業が進むのに合わせ、その時々でこのような場を設け、丁寧な説明を心がけていきたいと思っています。



↑ 参加者の質問に答える(左から)田中代表理事、中川業務執行理事、午来設立者、上野設立者

↓ 参加者を前にあいさつする田中代表理事



Topic 3

7月31日

斜里第一漁業協同組合 組合員向け説明会

in 斜里第一漁業協同組合

知床の短い夏の盛り、7月31日には、斜里第一漁業協同組合・桜庭武弘組合長の計らいで説明の場を与えていただき、約50人の地元漁業者を前に、大学院大学構想や当財団の活動についてお話をさせていただきました。

今回も田中代表理事、午来、上野両設立者、上野雅樹業務執行理事が出席しました。

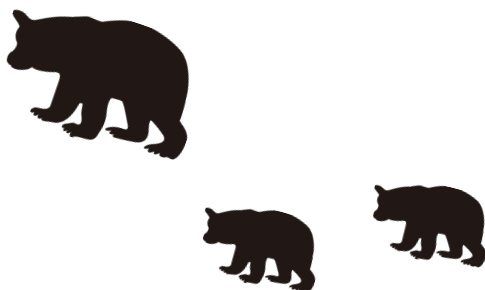


斜里第一漁業協同組合の会議室で行われた説明会。立って説明しているのが午来設立者

斜里町の主要産業の一つである漁業。市町村別で斜里町が水揚げ日本一を誇る秋サケ定置網漁が主流ですが、最近は海水温の上昇のためか、普段南方で獲れる魚が水揚げされることもあるようです。

このような環境の変化、海の変化は漁業にも大きな影響を与えることから、「長年斜里で漁業に携わってきた漁業者の皆さんの知恵もお借りし、研究機関としての大学院大学設立を目指していきたい」ということなどを訴えました。

漁業者の皆さんには、お忙しい時間を割いて我々の説明に耳を傾けていただき、心より感謝しています。



Topic 4

4月～10月 賛助会員、寄付金募集 活動について

財団が発足し、2013年度がスタートしてから、本格的に賛助会員や寄付金募集活動に乗り出しました。5月の斜里町民向け講演会を前に、財団の概要などを示したパンフレットを作成。主な町内企業、団体、役員の友人、知人など各所に送付させていただきました。

また現在まで田中代表理事、午来、上野両設立者が中心となって、町内企業や団体にご説明とあいさつ回りを行っています。

皆様の善意によって成り立つ活動ですので、今後も広く理解と協力を賜るべく、各所でお願いを申し上げたいと思います。

(賛助会員募集については、次のページに詳しく掲載しています。ご参照ください)

Topic 5

7月17日 国立科学博物館 林良博館長を訪問

7月17日には、渡辺綱男顧問、上野雅樹業務執行理事、鈴木幸夫理事の3人が、国立科学博物館(東京都台東区)の林良博館長を訪問し、大学院大学設立に向けた活動へのアドバイスをいただきました。

今年3月まで兵庫県森林動物研究センター所長だったご経験などから、今後当財団が進むべきプロセス、内容、方法について、貴重な指南を受けることとなりました。

Topic 6

8月9日 北海道庁訪問

8月9日には、田中代表理事、渡辺顧問、午来設立者、上野設立者、齋藤卓也理事、上野業務執行理事の計6名で、北海道庁を訪問。山谷吉宏副知事、竹谷千里環境生活部長にご報告と支援の要請を行いました。

約1時間の懇談の中で、山谷副知事からは、北海道唯一の世界自然遺産・知床に対する期待、文部科学省へのアプローチなど、多数の応援の言葉をいただきました。

Topic 7

10月30日 文部科学省、環境省訪問

10月30日には、田中代表理事、上野、中川両業務執行理事、渡辺顧問が、大学設置認可審査事務等を担う文部科学省の大学設置相談室を訪問しました。

高等教育局高等教育企画課大学設置室の今泉柔剛室長ら担当職員の方々が対応してくださり、訪問の趣旨、知床自然大学院大学構想などを説明。質疑応答では、今後の課題をご指摘いただいたほか、大変貴重なアドバイスをいただきました。

また、同日同メンバーで環境省の星野一昭自然環境局長を訪問しました。自然大学院構想について説明し、温かなアドバイスをいただくことができました。

賛助会員加入のお願いについて

理事 家村 充尋

(斜里郡清里町出身、千葉県在住)

賛助会員へのご加入をお願いするときに、知床世界自然遺産の特徴についてお話することがあります。世界自然遺産登録の基準として主なものが4つありますが、うち最低一つが満たされていなければなりません。日本の四つの世界自然遺産のうちで全てに共通して当てはまるのが、「生物の進化の過程が顕著にみとれる」という基準です。ところが知床自然遺産だけがこの他もうひとつの基準を満たしています。それが「生物多様性(biodiversity)」です。

これは実は松浦晃一郎(前ユネスコ事務局長、当財団顧問)氏が、一昨年の斜里町での講演で指摘されていたことの受け売りなのですが、私にはそれがとても印象に残っており、しばしば自分の話として自慢げに吹聴することがあるわけです。

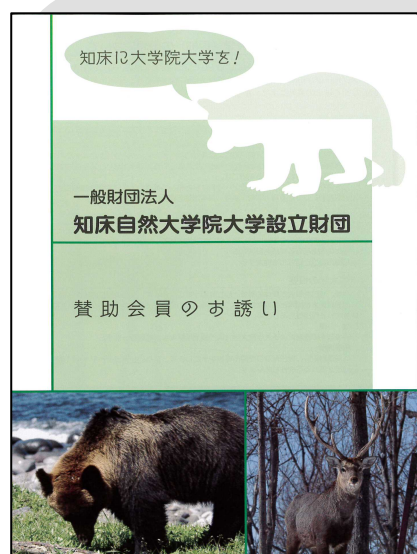
生物多様性の概念は非常にさまざまな場面、思考方法に関係することが多いと思われます。当財団のよって立つ指針のひとつとも言えるでしょう。地球上のあらゆる動植物が相互依存しながらどのような関係にあるか、解明されていないことはまだまだ多いのです。野生生物をじっくり観察するところから人間社会の重要課題の解決の糸口が見いだせる、ということもあるかもしれません。

当財団がめざす大学院大学ではそういう探求心を持った専門家、研究者を養成したいという夢のある有意義なプロジェクトです。

今のところ賛助会員募集は物理的限界のため現状では限られた範囲ですが、お願いすると大半の方が快くご加入もしくは寄付して下さいます。それだけ、この事業に期待もしくは夢を感じてくださる方は多いということだと思います。

現状では、当財団は「一般財団法人」ですから、会費もしくは寄付をいただいても税金の優遇等はありません。そもそも「良いプロジェクトですね」と理解を示してくださっても、実際寄付や会費を拠出していただくのは、相当踏込んだ行為をしていただくことになりますが、なおかつ税の優遇もないこの段階でお申込み下さるというわけですから誠に感謝です。

一方で公益認定の申請準備も進めております。「公益財団法人」に認定されれば、税法上の優遇措置が受けられるようになります。公益認定は、事業が「公益」要件を満たしているか、定款等の定めが基準を満たしているかなどのほか、「経理的基礎」と言って事業を安定的に継続できるかどうかを見極めるため安定した寄附金収入や会費収入を見込めることが鍵になります。そういう意味からも賛助会員になっていただくことは、大変心強い応援であると感じております。募集勧誘の体制も今後本腰を入れて進めてまいります。引き続き夢の実現に向かって皆様のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。



■知床自然大学院大学設立財団賛助会員とは

この財団の目的に賛同する個人・団体・法人が会費を通じて支援するものです

■会員の年会費

個人会員：5,000 円 団体会員：10,000 円 法人会員：100,000 円

■加入申込みは3つの方式から

- 1) パンフレット(左)折り込みの「払込取扱票」をご使用ください。
- 2) パンフレット(左)刷り込みの「申込書」をご使用ください。
- 3) 当財団のHPからお申し込みください。(http://www.shiretoko-u.jp)

※パンフレットをご希望の方は事務局までお気軽にお問い合わせください。

Tel 0152-26-7770 E-mail sizendaigaku@wine.plala.or.jp

知床コラム

地元斜里町、羅臼町在住の役員が、知床の今や自然環境について綴ります。

知床の秋

業務執行理事 中川 元

10月14日、斜里岳や羅臼岳に初冠雪がありました。知床は日一日と秋が深まっています。秋の知床は鳥やけもの達の活動が活発な時期でもあります。北からの渡り鳥も増えてきました。海岸や河口にはたくさんのユリカモメが集まっています。ユリカモメは夏はロシアのカムチャツカで繁殖し、本州で越冬しますが、春と秋の渡りの途中に知床にしばらく滞在します。「東京都の鳥」であり新交通システムの愛称でよく知られていますが、知床でも親しまれている鳥の一つです。冬鳥も既に渡ってきました。斜里川にはオオハクチョウやシロカモメが姿を見せています。11月にはオオワシの渡りも始まっています。

川にはカラフトマスやサケがたくさん上っています。知床が世界遺産になった理由の一つが「海域と陸域のエネルギー循環」です。サケ科の魚は豊かな海の栄養をたっぷり蓄えて川を上り産卵します。川のサケやその死体はヒグマやオジロワシ・オオワシの餌となり、食べ残しや糞は土に帰って森林の養分となります。知床の森や陸域の生物が海の栄養に支えられているのが知床の特徴です。ところが最近困ったことも起きています。サケを捕るヒグマを撮影するためにたくさんのカメラマンや観光客が集まり、ヒグマに近づいたり取り囲むといった、大変危険な状況が起きています。現地対応に当たる知床財団職員等の指導に従わない人も多く、対策に苦慮している状況です。野生動物の保護管理（ワイルドライフマネジメント）の中核は「人側の管理」に他なりません。野生動物の生息地で人間が行う多様な活動や行動と、野生動物の本来の生活とどう折り合いをつけて行くか、どう共存を図っていくかが重要な課題です。知床自然大学院大学の構想は、人と自然の調和をテーマに、これらの問題解決に当たる専門家を現場で養成することです。知床でこそ可能な教育と研究を目指します。

「知床ヒグマえさやり禁止キャンペーン」が行われています

知床では観光客らがヒグマにえさを与えることによって、ヒグマが食物の味を知って人に近づくようになり、不幸な事故が引き起こされることが懸念されています。

そこで知床斜里町観光協会をはじめ、地元関係団体が結集し、今年から「知床ヒグマえさやり禁止キャンペーン」として、野生動物へのえさやり禁止を強く訴えています。

安易な気持ちで食物を与えることが、ヒグマの未来、ひいては人間や知床の未来をも脅かします。ぜひその意味を知ってください。

HPはこちら <http://shiretoko-whc.com/esakin/>



ナミテントウの思い出……野生との共存

事務局長理事 金澤 裕司

あっという間に秋が深まった。こんな秋の一日にはいつもテントウムシを集めたくなる。

風の弱い10月の晴れた日で、ちょっと早歩きになると小汗をかくような気温の日には、よくテントウムシがたくさん飛び回っている。ナミテントウという種類のテントウムシだ。

成虫で越冬するナミテントウ (*Harmonia axyridis*) が大量に羽化し、越冬場所を探し回っているのだ。

ナミテントウは黒地にオレンジ色の紋が2つまたは4つある型、黒地にオレンジまたは赤の紋が多数ある型、オレンジ色の地に黒い小さな紋が19個ある型、オレンジ色の地で無紋の型など変化に富んだ模様があり、これらはメンデルの法則に従って遺伝することがわかっている。

学生時代、友人とナミテントウの斑紋の出現割合の地域差を比較するためにあちこちに出かけてナミテントウを集めたことがあった。秋晴れの日、無心に網を振る楽しさに調査の本来の目的を忘れがちになったものだ。そんな原体験のせいだろうか。今でもテントウムシの飛び日になると、無闇に捕まえて集めてみたい衝動を覚えるし、この虫が大好きだ。半球形で濡れたような光沢があり、変化に富んだ模様や色彩のパターン。ナミテントウを集めてずらりと並べてみたい、と思うのは原始的な収集欲だろう。子どもがプラモデルを欲しがると同じレベルだ。

たくさんのタマムシの翅で飾った「玉虫厨子」は聖徳太子の慰霊のためのものだが、誰か僕のために「テントウムシの厨子」を作ってくれないかと思う。

先日我が家の古い和室の壁に新しい漆喰を塗った。プロの職人の仕上げに比べ、コテの跡だらけで「手作り感」満点なのだが、所々に海岸で拾ってきた軽石をはめ込んでみるとそれなりの味わいが出てきた（と思う）。

軽石の代わりにテントウムシの羽をはめ込んでみたいと考えた。だが、この提案は全てを説明し終わる前にあっさり却下されることは明らかに思われた。

「あんなクサイ虫！・・・」と。

そうなのだ。テントウムシはカメムシと同じようにアルデヒド類を主成分とする強烈な悪臭を出す。可愛らしい形、美しい色や模様でも臭いのために意外に嫌われることが多いのがテントウムシである。

学生時代に僕らが集めたナミテントウの標本を一目見ただけで「ウワッ、気持ちが悪い」と叫んだ人のなんと多かったことか。

ワラジムシ、ゴキブリやカマドウマ、カヤブヨやアブなど嫌われる昆虫は多い。これらはそれぞれに嫌われる理由がある。

しかし、最近は「虫である」いや、正確には「節足動物だ」というだけで拒否する風潮が強まっている。中高生などは、ファッションで虫を嫌っているのではないかと疑いたくなることも少なくない。なぜなら、そういう人に限ってエビやカニが大好物だったりするのだが。

「野生生物との共生」は自然保護の基本的な要件だ。だが、共存していく相手は、野生生物だけではなく、野生生物に対して自分とは違った感覚で接している人間たちをも含むのだ。

「野生動物との共生」には、実は「自分と違った感覚の他人との共生」も含まれる。その上で、その人々の感じ方を変えていくことが自然環境の保護ということになるのではないだろうか。

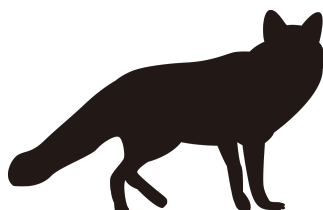
理事会報告

財団設立からこれまでに開かれた理事会についてご報告します

(準備) 理事予定者会議

日時：平成24年12月16日(日) 13:30～16:30
場所：道の駅しゃり コミュニティホール

法人設立を前にして、設立趣旨、定款、設立後の活動方針、役割分担などの運営体制を確認するために、設立者の午来昌氏、上野洋司氏をはじめ評議員、理事、監事、顧問への就任予定者17名が参加しての理事予定者会議を開催した。また、最初の事業年度の事業計画の素案について討議を行った。



第1回理事会

定款第36条に基づく「決議の省略」による

理事会の決議があったとみなされた日
平成25年2月28日

登記終了後、速やかに最初の事業年度の事業計画、収支予算を決定するため、2月20日に田中代表理事の発議により理事及び監事全員に対してメール等の送信により提案書を送付。理事9名全員と監事2名全員が承認。

「2012年度事業計画及び収支予算」「稟議・決裁権限規程」「賛助会員規程」「理事会運営規則」「財産運用管理規程」「事務局規程」「事務局長を金澤裕司理事に委嘱する件」を決議しました。



第2回理事会

日時：平成25年3月24日（日）13：00～16：00

場所：斜里町ゆめホール知床 会議室2

出席者は理事8名、評議員他3名。

2013年度の活動方針及び事業計画、収支予算の検討、及び今後の大学院大学計画策定の軸となる「専門委員会運営規則」の検討、また、第1回及び第2回評議員会の開催方法と第3回理事会開催に関する議論、当法人の英語表記について議論などのために開催。

代表理事、業務執行理事による業務報告に続いて「2013年度事業計画」「2013年度収支予算」「専門委員会運営規則」「コピー機等リース契約の承認」「第1回評議員会の開催」を決議。

当財団の英語表記に関しては検討課題として次回理事会に持ち越しました。また、設立趣旨の英語版、中国語版、ロシア語版の作成原案が家村理事によって提案され、十分な校正とチェックを経て発行することを確認しました。

※設立趣意については、当財団パンフレットに掲載しているほか、ホームページに日本語版、英語版、中国語版、韓国語版、ロシア語版を掲載しています。

第3回理事会

日時：平成25年5月26日（日）13：00～15：20

場所：斜里町ゆめホール知床 会議室2

出席者は理事8名、監事1名、評議員4名、顧問2名。

今理事会は評議員にも参加を要請して開催。これは事業報告や決算報告に関して理事会と評議員との間で十分なコミュニケーションをとるためです。「2012年度事業報告書（案）」「2012年度決算報告（案）」「役員等の報酬等の支払に関する規程（案）」「公益認定申請に関する件」「第2回評議員会招集及びその議案について」「評議員会運営規則（案）」「専門委員会の人選について」が活

発な議論や質疑応答を経て決議・承認されました。また、第2回に続き、当法人の英語表記に関しては「wildlife management」を軸として、この法人の目指す大学院像を明確にするための有益な議論となりました。また続いて第1回評議委員会を開催しました。

第1回評議員会

日時：平成25年5月26日（日）15：20～16：00

場所：斜里町ゆめホール知床 会議室2

出席者は理事8名、監事1名、評議員4名、顧問2名。

理事会に引き続き評議員会を開催し、「評議員会運営規則」「役員等の報酬等に関する規程」「公益認定申請に関する件」が決議・承認され、また「基本財産の確認に関する件」を承認しました。また、代表理事及び業務執行理事から、業務執行状況が報告されました。

第2回評議員会

評議員会の決議があったとみなされた日

平成25年6月24日

第3回理事会及び第1回評議員会での議論や説明に基づき、6月18日に田中代表理事の発議により評議員全員に対してメール等の送信により提案書を送付。

評議員全員が「2012年度事業報告書」「2012年度決算報告書」を承認しました。



<お知らせ>

日本ユネスコ運動全国大会が知床で開催されます

第70回を迎える大会は、全国280のユネスコ協会の代表が集い、2014年6月7日(土)、斜里町ゆめホール知床で行われます。

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とのユネスコ憲章前文を現実化するために、「世界遺産運動」はじめユネスコの取り組みが世界各地で進められています。日本では、この精神を広める民間ユネスコ運動が世界に先駆け取り組まれてきました。

記念すべき70回大会は、世界自然遺産の地・知床で「持続可能な社会の構築をめざして～知床に集おう！ユネスコの英知」の大会テーマのもと開催されます。

※概要は下記の通りです。

第70回大会記念特別講話

松田昌士 日本ユネスコ協会会長

パネルディスカッション

基調講演 石弘之氏

(環境問題研究家・元東京大学教授)

パネリスト

山中正実氏 (知床博物館館長)

石川幸男氏 (弘前大学白神自然研究所教授)

大島慶一郎氏 (北海道大学低温科学研究所教授)

松田裕之氏 (横浜国立大学大学院教授)

司会

中川元氏 (元知床博物館館長)

提言

午来昌氏 (元斜里町長)

また、知床圏のユネスコスクールに加盟する高校の生徒による「ユネスコスクール若者のつどい」も開かれます。



9月15、16日に東京で開かれた第69回大会で、第70回知床大会をアピールする関係者(左から3番目が馬場斜里町長)

編集後記

今年1月に財団が発足してから、もう10カ月が過ぎようとしています。初めてのニュースレター発行となりました。この間に少しずつ支援、協力の輪が広がり、多くの方が知床や知床の自然について、思いを寄せてくれているのだなあと実感する日々です。

このニュースレターでは、少しでも財団の活動を知ってもらおうと、各種報告、コラム、インタビューなど盛りだくさんの内容で掲載したつもりですが、なにぶん手作りのニュースレターですので、至らぬ点多々あるかと思います。感想やお気づきの点がありましたら、事務局までお気軽にお寄せください。

第2号は2014年3月頃に発行予定です。今後ともどうぞよろしくお願いします。

事務局 (竹川)

設立財団ニュースレター 第1号

発行 一般財団法人知床自然大学院大学設立財団

〒099-4117 北海道斜里郡斜里町青葉町28-10

TEL 0152-26-7770 FAX 0152-26-7773 E-mail sizendaigaku@wine.plala.or.jp

Web <http://www.shiretoko-u.jp>

発行日 2013年11月10日

本誌掲載記事・写真などの無断転載をお断りします。